

隨泉寺寺報

平成 24 年 (2012 年) 5 月号 第 501 号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

宗祖降誕会法座

講師 住職自修

講題 『いのちめぐまれて』

■宗祖降誕会 《親鸞聖人のご誕生を祝って》

ともしびを、たかくかかげて、わがまえを、ゆく人のあり、さ夜なかの道
宗祖降誕会とは、浄土真宗の開祖親鸞聖人の誕生日を記念して、聖人の生涯と
その教えに思いをいたし、自分自身の日々の生活を省みることを目
的とする集いです。

親鸞聖人は、平安時代の末期 承安 3 年 (1173 年) 5 月 21 日、
京都の南の郊外、日野というところでお生まれになりました。

平家一門が隆盛を極めていたときです。父親は日野有範という藤
原氏の一族で、後に隠遁して、出家したと伝えられています。そして、
母親は 8 歳のときになくられたといわれています。

親鸞聖人はお釈迦様が説いてくださった膨大な教えの中から、すべての人々が、
無条件で救われる道を見つけてくださいました。私がお念仏のみ教えにあえたの
は親鸞聖人が伝えて下さったからです。ようこそ、ようこそお生まれになっ
てくださいましたという思いです。

降誕会はその親鸞聖人のご誕生をお祝いする法座です。どうぞお参り下さい。

5 月の法座予定

- 5 月 13 日 …… 掃除 鴨の巣
- 5 月 14 日 昼席午後 1 時より …… 宗祖降誕会法要
- 5 月 15 日 朝席午前 10 時より …… 門信徒会総会 おとき
- 5 月 15 日 昼席午後 1 時より …… 宗祖降誕会法要 引き続き修復委員会
- 6 月 2 日 午後 6 時より …… 門信徒会本部役員会



☆初参式 (はつまいり) 5 月 14 日 (日) 午後 1 時～

平成 23 年生まれの皆さんの初参式 (はつまいり) を行います。初参式とは、新し
い生命の誕生をよろこび、生きることを教え、真のよりどころとなっ
てくださる阿弥陀如来の前で人生の出発をする式であります。生まれ
難い人間に生まれ、人生の出発の時にあたり、真実の阿弥陀如来に
会うという、なによりのご縁をいただくことは、この上もない幸
せであろうと思います。子供が生まれて人間ははじめて親になる
のですから、「初参式」は子供にとっても親にとっても初参りとなり
ます。親子にとって人生におけるお念仏との新たなであいであり
ます。阿弥陀如来のご本願をよりどころとあおぎながら、力強く
いきくことを誓う大切な儀式と心得て、参加してください。

※ 5 月 14 日 1 時より平成 23 年生まれのお子様の初参式を
隨泉寺本堂で行います。お隣ご近所に該当されるお子様がお
られましたら、是非お誘い下さい。みんなでお祝いいたしまし
ょう。尚準備のため地区の役員の方にお知らせ下さい。

☆門信徒会総会 5 月 15 日 (火) 朝席終了後～

門信徒会の総会を開催します。

平成 23 年度の行事報告、決算と平成 24 年度の行事予定、予算
等の審議・承認などを行います。今年の門信徒会の方針等お気
づきの点がありましたら、積極的にお話してください。門信徒
会の意味を考えるとときでもあります。

この頃、おうちでひとりで亡くなられる方が増えてきました。

世間でよく言われる【孤独死】【孤立死】です。理由や要因は
いろいろ挙げられるでしょうが、一番よく言われていることは、
本当の意味での『つながり』の消滅です。核家族というよりも、
個人一人ひとりが生きている状況です。年寄りと離れて暮ら
すということだけではなく、親と子ども々に暮らしているとい
うのも珍しくありません。

苦しいことや、悲しいことがこの頃、特に出てきたわけでは
ありません。苦しみは 3000 年前と同じように、生、老、病、
死と人間関係、経済問題と人間の欲望と、お経の中に説かれて
いるそのものです。その苦しみに、一人でたった一人で向き合
わなければならないのです。だからこそ今、本当の拠りどころ
が必要なのです。仏様が必要なのです。また一緒になって泣
いてくださる友が必要なのです。おなじみ教えに会う私たちが支
えあう組織が門信徒会です。門信徒会はここに存在価値がある
のです。

☆御礼

永代経懇志 金 拾萬円 河内 尚文殿 故 河内 カツミ様 特 永代経志として
永代経懇志 金 拾萬円 土本 武士殿 故 土本 澄子様 特 永代経志として

☆御礼

門信徒会へ 金 一封 河内 尚文殿 故 河内 カツミ様 香典返しとして

5月 生きる喜びにめざませて くださるのがほとけさま

仏さまのお慈悲には四つのおはたらきがあると聞いています。「慈」「悲」「喜」「捨」の四つです。どんな暗い重い宿業を背負って、その荷の重さに押しつぶされそうになっている者にも、生きがいを失ってヤケになっている者にも、劣等感にとりつかれてしょげている者にも、自信を回復させ、勇気を与え、希望を育て、生きる喜びに目覚めさせてくださるのが仏さまです。

「泣」という字は、「サンズイ」に「立」という字が添えてあります。「涙」という字は、「サンズイ」に「戻」という字が添えてあります。これは、私たちが深い悲しみに出会い、涙に溺れてしまいそうになっているとき、それがどんなに深い悲しみであっても、必ず

「立」ち上がらせずにはおかないという、仏さまの願いを表すために「サンズイ」に「立」を添えて「泣」という字にし、「涙」におし流されてしまおうとする私たちを、必ず、引き「戻」してくださる仏さまのお心を表すために「サンズイ」に「戻」を添えて、「涙」という字にしてあるのだと聞いたことがあります。

『観無寿経』の中の「諸仏如来 是法界身 入一切衆生 心想中」（諸仏如来は是れ法界の身なり。一切衆生の心想の中に入り給う）という

おことばがあります。

如来さまは、いつも、私たちの心や想いの中におはいりくださって、私たちをお導きくださっているのです。私たちが、悲しみの底に溺れて泣いているときには、新しい視点をお与えになって、立ち上がらせ、悲しみの涙におし流されてしまおうとしているときには、新しい生きがいをお示しくださって、引き戻してくださるのでしょう。

「そのうちにばばちゃんポストもできるかも？」

★ 赤ちゃんポストに81人、安易な理由も続々……

親が養育できない子供を、匿名で託せる慈恵病院の「こうのとりのゆりかご」（赤ちゃんポスト）について、運用状況の検証報告書を公表した。2007年5月の運用開始から昨年の2011年9月までの約4年半に預けられた子供は81人（男児40人、女児41人）で、うち8人は障害児だった。報告書は、子供の遺棄防止などの効を認める一方、「留学」など安易な理由で預けるケースもあるとして対策を求めた。



この2年間に預けた30人の親に理由（複数回答）を聞いたところ、「生活困窮窮」「未婚」が各9件、「世間体・戸籍に入れたくない」「パートナーの問題」が各6件、「不倫」が4件だった。

赤ちゃんポストのニュースを見るといつも『姨捨山(おばすてやま)』の話を思い出す。食糧事情の貧しかったその昔、日本のある地域では一定の年齢に達した老人は、口減らしのために山に捨てられるという風習があった。信濃の国の姥捨て山の麓に住むある若い農夫が、老いた母親を捨ててに行くことになった。若い農夫は村のシキタリに従って、母親を籠に乗せ、姥捨て山へと向かっていった。ところが、その道すがら、背中に負われた母親が、しきりに木の枝を折っては道々に捨てていくのだ。これを見た若者は、「ひょっとして、母親は、この落とした枝をたどって、また家に帰ってくるつもりではないのか」と疑った。「気丈な母親でも、やはり最期は自分のことしか考えないのか」と、少し蔑むような目で見ていた。とうとう「捨て場所」と思しきところにやってきた。息子は母親を背中から降ろし、れを告げて帰ろうとした。その時、母親は息

子の袖を捕まえて言う。「いよいよこれがお前との一生の れじゃ。身体に気をつけるんだよ。お前が家に帰るのに道に迷って困るだろうと思って、私が来る道すがら小枝を落として目印をしておいたから、それを頼りに無事家に帰るんだよ。」そう言って母親は息子に手を合わせる。その母親の姿を見て若者は泣き崩れた。こちらは母親を捨てているのに、母はこちらをこんなに憂っている。こんな母をどうして捨てられようか、息子は思わず知らず、草むらに両手を着いて再び母を背負って山を降りたということだ。

母を捨てようと「1人」で母を背負って歩いてきた道は、気付いてみれば母と一緒に歩いてきた道だったのだ。

自分がまさに捨てられようとしている状況にありながらも、母親は自分のことは一切顧みないでひたすら我が子が無事家に帰れるかどうかだけを心配している。母は、今まさに自分を捨てようとしている我が子を見捨てることが出来ないのだ。自分を殺そうとしている者をどこまでも生かそうとするのだ。これが仏さまの心ではなからうか。こちらの目から見て「都合の悪いもの」でも仏様の目から見たら全てが同じ、分のない命。煩惱にまみれた私を見捨てず、どこまでもよりそってくださる仏の慈悲の心を考えたら自分や社会の「都合」で捨てることの軽率さを思わずにはいられない。「都合」を超えることはできないけれど、都合を超えた仏様の生き方を見習うことはできるのではなからうか？

アインシュタインが日本に来た時、仏様の話（姨捨山の話をして）を聞いて涙ながらにこう語ったそうだ。

「日本人がこのような温かい深い宗教を持っていることはこの上もない幸せなことです。日本に来てこんな素晴らしい教えに出遇えたことは私にとって何にも勝るものでした」

